

## 人生の意味への問いの諸相

—問いのきっかけや重要性、自我体験との関連から—

浦 田 悠

「人生の意味とは何か？」という問いは、心理学の領域では「人生を意味あるものとするような個人の経験の特徴は何か？」「個人が人生を意味あるものとして経験する条件は何か？」というような問いへと変換され (Battista & Almond, 1973), 欧米で実証的な研究が蓄積されてきた。これらの一連の研究では、主に意味経験の主観的な強さや意味内容についての検討がなされてきており、おおむね人生の意味とウェルビーイングにはポジティブな関連が認められることや (e.g., Pöhlmann, Gruss, & Joraschky, 2006; Reker, Peacock, & Wong, 1987), 年齢や社会文化的背景によって、経験される意味内容が異なることなどが示されている (e.g., DeVogler & Ebersole, 1981; Ebersole & DePaola, 1987; 浦田, 2007)。

しかし、先行研究の多くは「個人にとって重要なもの・意味あるもの」を人生の意味とみなしているため、すでに意味構築がなされ、意味の経験内容が明示できる者を対象としており、意味への問いの途上にある者における意味への懐疑の内容は、方法論的にも問題とされてこなかった。またそれゆえに、人生の意味を問い始めたきっかけや個人にとっての問いの重要性の差異についても、欧米の研究では取り上げられてはこなかった。

わが国では、欧米に比して人生の意味についての心理学的研究が少ないのが現状であるが、人生の意味への問いのきっかけや個人にとっての重要性に関する検討はいくつか見られる。問いのきっかけについて、亀田 (2003a) は、生きる意味への問いの契機についての自由記述による調査から「将来の探求」「具体的なコンフリクト」「コンテクスト、外部刺激、他者の死、ふと、その他」の3つを主たる問いの契機として挙げており、それらが、生きる意味の問いと関連があることを示唆している。人生の意味や目的の獲得の重要性については、尾崎 (1997ab, 1998) が、人生の意味や目的を獲得していることが適応との関連を持つという可能性を示している。今後、人生の意味への問いが重要となる文脈や、問うきっかけ、そしてそれが個人の発達に及ぼす影響について、より詳細な検討が求められる。

このように、人生の意味への問いを問題にするならば、冒頭に挙げた心理学における2つの問いに加え、「人が人生の意味を問う発達の背景や条件は何か？」という問いも立てるべきであろう。ここで、人生の意味への問いと類似の形で発達早期に問われる問いとして示唆的なのが、近年わが国における一連の研究で検討されてきた「自我体験」である。渡辺・小松 (1999) は、青年への調査をもとに、「なぜ私が私なのかという問いを中心に、それまでの自己の自明性が疑問視される体験、および、この困難な疑問に解決を与えようとする思索の試みであって、自己の独自性・唯一性の強い意識を伴うこともある」(p. 20) というような体験を自我体験と定義している。その後、渡辺らによって、自我体験の発生率や初発年齢、アイデンティティとの関連等が

検討され（渡辺・高石，2004），①初発年齢のピークは，前思春期と考えられること，②おそらく半数近くが自我体験をしていると考えられるものの，大学生では想起率が15%から30%に低下すること，③それらを踏まえると，後期青年期を中心としたアイデンティティの危機・混乱とは異なる自己意識発達上の意味を持つ可能性があることなどが示唆されている（渡辺，2004）。この自我体験は，「問い」が体験の中心的な問題となっていることや，それらが，「自分とは何か」「なぜ自分は自分なのか」というような存在論的な問いであることなどから，人生の意味への問いと親近性の高い概念であると思われる。

これらを踏まえ，本研究では，まず人生の意味への問いの諸相を捉えるため，質問紙調査によって，問いへの関心やきっかけ，個人にとっての重要性などの観点から検討した上で，人生の意味への問いと自我体験との関連を探る（研究1）。つづいて，研究1の質問紙における知見を補うべく，インタビューにより自我体験を聴取し，人生の意味との関連を検討する（研究2）。

## 研究 1

### 目 的

人生の意味への問いについて，その内容や問うきっかけ，個人にとっての問いの重要性についての自由記述を分類・分析した上で，問いと自我体験との関連を検討する。

### 方 法

**調査対象者** 大学生・大学院生164名（男性79名，女性85名）。主に大学1年生である。

**調査時期** 2004年7月から11月である。

**質問紙の構成** 人生の意味への問いについての関心の程度 『私という存在が，この世界，この時代に生まれ，こうして生きており，そしていつか死んでいくということの意味とは何か』『私はなぜ存在し，なんのために生きているのか』と問われるような『人生の意味』について，普段考えることはありますか？』という質問（「よく考える」「ときどき考える」「あまり考えない」「全く考えない」の4段階評定）。

**問いの内容** 『人生の意味』について考えるとき，それはあなたの中でどのような問いとなっていますか？あなたにとっての『人生の意味』への問いを，問いの形のままで，できるだけ具体的にお答えください』という質問。

**問いを持った時期ときっかけ・状況** 『人生の意味』について，今まで真剣に考えた時期がありますか？あるとすれば，何をきっかけに，どのような状況で考えていましたか？』という質問。

**問いの重要性とその理由** 『人生の意味』を考えることは，一般的に言って，生きていく上で大事なことだと思いますか？』（「大事だと思う」「どちらでもない」「大事ではないと思う」の3段階評定）と「その選択肢を選んだ理由をご記入ください」という質問。

**渡辺・小松（1999）の自我体験調査の質問項目** 19項目，「はい」「いいえ」の2件法の質問項目に加え，その中の最印象項目の選択と，体験のきっかけと，体験時の状況についての自由記述。

### 結 果

**人生の意味への問い** まず，人生の意味について普段考えるかどうかということについては，

「よく考える」(19.6%)、「ときどき考える」(52.3%)、「あまり考えない」(19.0%)、「全く考えない」(9.2%)となった。また、「よく考える」と「ときどき考える」とを「人生の意味を考える群」として合計すると、164名中117名となり、全体の71.3%である。ここで、人生の意味への問いを問う程度が、性によって人数比率に差があるかを検討するために $\chi^2$ 検定を行った。

その結果、Table 1に示すように、人生の意味への問いを問う程度には性によって差があることが示された( $\chi^2(3) = 17.42, p < .01$ )。ここから「よく考える」が男子に有意に偏りがあり(調整済み残差=2.6,  $p < .01$ )、「あまり考えない」で女子に有意に偏りがある(調整済み残差=3.7,  $p < .01$ )ことが分かる。

Table 1 人生の意味への問い

	よく考える	ときどき考える	あまり考えない	全く考えない	合計
男	22 ( 2.6) **	42 ( 0.3)	6 (-3.7) **	9 ( 1.0)	79
女	10 (-2.6) **	43 (-0.3)	26 ( 3.7) **	6 (-1.0)	85
合計	32	85	32	15	164

\*\* $p < .01$

次に人生の意味への問いの内容について、亀田(2003abc, 2004)の研究で見られている人生の意味への問いの分類(「人生の目的への問い」「人生の価値の懐疑」「存在の根拠への問い」)を参考にしつつ、KJ法(川喜田, 1967)に準じて分類を行った(Table 2)。Table 2における「その他一般の問い」を除く3つの大カテゴリーについて、評定者2名(心理学系の大学院生)によって、回答者がどの人生の意味への問いを記述しているかを独立して判定し、一致したものだけを採用した。判定者間の一致率は89.9%であり、有効回答数は107例(「目的への問い」40例、「根拠への問い」12例、「価値への懐疑」55例)であった。

また、問いの契機についての自由記述は、亀田(2003a)の問いの契機の分類も参考にした上で、KJ法に準じて分類した結果、「将来の探求」「具体的なコンフリクト」「コンテキスト、外部刺激、他者の死、ふと」の3つに分類された。

以上の分類結果に基づいて、問いと契機との関連性について検討するために、 $\chi^2$ 検定を行った。しかし検定の結果、有意な偏りは見られなかった( $\chi^2(4) = 4.77, n.s.$ )。

**問いの重要性** 問いの重要性に関して、性によって、人生の意味への問いの重要性に差があるか、ということについて $\chi^2$ 検定によって検討したところ、5%水準で偏りがあることが示された( $\chi^2(2) = 7.95, p < .05$ )。Table 3に示しているように、「大事だと思う」で男子に偏る傾向が見られ(調整済み残差=1.9,  $p < .1$ )、「どちらでもない」で女子に有意に偏りが見られている(調整済み残差=2.7,  $p < .01$ )。

**自我体験調査の質問項目の因子分析および信頼性分析** 自我体験調査の質問項目について、因子分析(主因子法・プロマックス回転)を行った<sup>1)</sup>。因子分析の結果、因子負荷量が低い項目7(「いま、夢の中にいるのかもかもしれないと思って、不安になったことがある」)を除いた18項目において、統一的解釈が可能な4因子を抽出した。それぞれ渡辺・小松(1999)の研究と類似の因子構造が得られ、因子負荷量の大きさにしたがって、それぞれの因子を「自己の根拠への問い」

Table 2 人生の意味への問いの分類

人生の目的への問い	生活の満足や幸福への問い	「どうすれば満足で幸せな人生を送れるのか」	
	日常生活における目的への問い	「繰り返す日々を生きていくことの意味は何か」	
	自己の意志への問い	「自分は人生で何がしたいのか」	
	行為の意味への問い	「なぜ大学で勉強しなければならないのか」 「人生において働く意味は何か」	
	当為への問い	「自分の人生で何をなし、いかに生きるべきか」 「この社会や世界で果たすべき役割は何か」	
	人類一般への問い	「他の生命を奪い、資源を消費して人類が生きていることの意味は何か」 「人類はなんのために存在しているのか」 「なぜ人間（動物）は遺伝子を残すのだろうか」	
苦業の意味・死の意味への問い	苦しみや悲しみは避けられないのになぜ生きるのか	「苦しみや悲しみは避けられないのになぜ生きるのか」	
	幸せや喜びは儚く刹那的なのになぜ生きるのか	「幸せや喜びは儚く刹那的なのになぜ生きるのか」	
	いつか死ぬのに、なぜ生まれ、生きているのか	「いつか死ぬのに、なぜ生まれ、生きているのか」	
人生の価値の懐疑	自己価値感・自己効力感への問い	「自分が生きていて世界に何か影響を与えているのか」 「自分が死んだあと、他者や世界に影響を残すことができるか」 「自分は世の中に役に立っているだろうか」 「いてもいなくてもいい自分が存在する意味はあるのか」 「自分は他者に何ができるだろうか」	
	存在の根拠への問い	哲学的な存在の意味への問い	「どうして今生きているのが他の誰でもない自分なのか」 「自分が今ここに生きているとは何か」
	その他一般の問い	一般的な意味への問い	「人生に意味はあるのだろうか」 「なぜ生きるのか」

Table 3 人生の意味への問いの重要性

	大事だと思う	どちらでもない	大事ではないと思う	合計
男	47 ( 1.9) +	22 (-2.7) **	8 ( 1.4)	77
女	39 (-1.9) +	42 ( 2.7) **	4 (-1.4)	85
合計	86	64	12	162

+ $p < .10$ , \*\* $p < .01$

「主我と客我の分離」「自己の唯一性の自覚」「独我論的懐疑」と命名した。

また、自我体験調査の質問項目の内の一貫性（信頼性）を見るため、Cronbachの $\alpha$ 係数を算出したところ、尺度全体（ $\alpha = .78$ ）、「自己の根拠への問い」（ $\alpha = .75$ ）、「主我と客我の分離」（ $\alpha = .58$ ）、「自己の唯一性の自覚」（ $\alpha = .56$ ）、「独我論的懐疑」（ $\alpha = .58$ ）となり、第2因子、

第3因子、第4因子については低い信頼係数であり、内的整合性が確認できなかったが、参考として今後の分析にもこの分析結果を用いることとし、自我体験と人生の意味への問いとの関連について見ていくことにする。

**自我体験と人生の意味への問いとの関連** 自我体験と人生の意味への問いとの関連を検討するために、渡辺らの自我体験に関する質問項目と、人生の意味への問いについての関心の程度とのSpearmanの順位相関係数を算出した (Table 4)。

Table 4 自我体験と人生の意味への問いとの関連

	人生の意味への問い (被験者全体)	人生の意味への問い (自由記述による判定者のみ)
	N=164	N=24
自己の根拠への問い	.48 **	.31
主我と客我の分離	.31 **	.44 *
自己の唯一性の自覚	.13	.00
独我論的懷疑	.17 *	.13
自我体験尺度全体	.43 **	.33

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

Table 4に示すように、尺度全体と人生の意味への問いが中程度の正の相関を示しているとともに、「自己の根拠への問い」と「主我と客我の分離」が中程度の正の相関、「独我論的懷疑」が弱い正の相関を示している。

さらに、自我体験についての質問項目の得点によって、人生の意味への問いの程度がどのように影響されるか、ということを検討するために、「よく考える」と「ときどき考える」とを「考える」群として1つのグループにまとめ、「考える」「あまり考えない」と「全く考えない」の3グループを、自我体験

の各下位尺度得点から予測するという判別分析を行った。その結果、第1番目の正準相関係数は有意であり (0.48,  $p < .01$ )、判別関数係数と、グループ重心の関数は、Table 5, Table 6のようになり、判別の中率は、59.1%であった。2つの表を合わせて解釈すると、「独我論的懷疑」以外の自我体験の各下位尺度得点が高いほど、つまり各下位尺度項目で「体験あり」という回答が多いほど、人生の意味を考える傾向にあるということがいえる。

しかし、この自我体験についての質問項目は、非常に曖昧・多義的であり、これが特殊な体験であると理解したうえで回答した者と、自我体験とはさしあたって関係のない何かを読み取って回答した者、つまり、自我体験の体験者と非体験者の両方が含まれてしまう (渡辺・小松, 1999)。ゆえに調査結果は、数量的な観点と、内容的な観点の双方から分析をする必要がある。そこで、

Table 5 標準化された正準判別関数係数

自己の根拠への問い	0.87
主我と客我の分離	0.23
自己の唯一性の自覚	0.2
独我論的懷疑	-0.11

Table 6 グループ重心の関数

考える	0.32
あまり考えない	-0.53
全く考えない	-1.38

渡辺・小松（1999）の自我体験の判定基準に従って、質問紙の最印象項目についての自由記述から、2名の判定者が独立に判定を行い、その判定が一致した24例を、自我体験の事例とみなし、その上で、改めて自我体験に関する質問項目と人生の意味への問いについての関心の程度との相関を見た。その結果、Table 4に示しているように、「主我と客我の分離」に、中程度の相関（ $r = .44$ ,  $p < .05$ ）が見られた。

また、判定基準によって自我体験の事例であるとみなされた群と、自我体験とはみなされなかった群とで、自我体験に関する質問項目の得点の平均に差が見られるかを検討したところ、「自己の独一性の自覚」以外の全ての因子で、体験者とみなされた群のほうが有意に平均が高かった（Table 7）。これらの結果から、自我体験が認められる者は、自我体験に関する質問項目の得点もおおむね高いということが示された。

Table 7 自我体験記述「あり」群と「なし」群の平均値の検定結果

	自我体験の記述				t値
	あり (N=24)		なし (N=140)		
	M	SD	M	SD	
自己の根拠への問い	5.20	-1.79	3.57	-2.10	3.58 **
主我と客我の分離	3.58	-1.38	2.84	-1.45	2.33 **
自己の独一性の自覚	2.04	-1.12	1.78	1.24	0.98
独我論的懐疑	1.33	-0.82	0.69	-0.78	3.70 **
自我体験尺度全体	12.67	-3.99	9.30	-4.03	3.78 **

\*\* $p < .01$

## 考 察

本研究では、人生の意味への問いの諸相をさぐるために、まず人生の意味への問いをめぐって、きっかけや重要性の観点から分析を行い、次に人生の意味への問いと深く関連していると思われる自我体験についての検討を行った。

人生の意味への問いについて、まず意味を問う程度の性差について検討した結果、男子のほうが女子よりも人生の意味を問うことが頻繁であるのに対し、女子は男子に比べ、問うことはあまり多くないという傾向が見られるとともに、人生の意味への問いが重要であるかどうかという点についても、男子のほうがより重要であるとみなす傾向が見られた。尾崎（1997ab）の研究において、意味や目的を見出そうという探求的態度を持っていなければ不適応感は高くなるという結果が出ていることを合わせて考えると、男子のほうが、探求的な態度が強く、そのことによって人生の意味への問いにつながるような心理的問題をより抱えやすいのではないかと考えられる。

また、人生の意味への問いの内容と、問いの契機について、亀田（2003a）の研究を参考に分析したが、本研究では、問いの内容と、問いの契機の間に関連性があるという結果は得られなかった。この原因として、まず第1に、亀田の研究では、問いの内容の3側面（「人生の目的への問い」「人生の価値の懐疑」「人生の根拠への問い」）にまつわる具体例の教示をおこなっていたこ

とにより、被験者がより明確に人生の意味への問いを意識化できたことが挙げられる。また第2に、本研究では自我体験と現在の人生の意味への問いの関連を見るという目的から、「普段どの程度考えますか」という教示をしていたのに対し、亀田では、「過去および現在において、考えたことはありますか」という教示であったことから、問うきっかけとなった当時の問いの内容が記述されやすかったのではないかと考えられる。一方、本研究では、人生の意味への問いの3側面について、判定者間の一致率が89.9%と高かった（亀田の研究では61%）。これは、本研究が「問い」を問いの形のままで記述することを求めており、問いの内容がより明確に表現されていたからではないかと思われる。

次に、自我体験と人生の意味への問いとの関連について相関分析、判別分析、そして自由記述による体験者の分類後の分析という3側面から分析したが、この分析結果についての解釈にはなお注意が必要である。これらの項目は、結果でも述べたように、自我体験とはさしあたって違うものを読み取って回答される可能性が大きい。たとえば「自分はいったい何者なのか分からなくなったことがある」という項目は、アイデンティティ拡散の状態とも読み取られる可能性があり、「他人も自分と同じようにものを考えたり感じたりするのだろうかとか、私だけが本当に生きていて他人はみんな機械のようなものではないかとか、思ったことがある」という項目は、典型的な離人症状の記述とも解釈できる。ただ、自由記述から自我体験が認められると判定された者は、この自我体験に関する質問項目でも平均よりも高い得点を示しており、より多くの項目に「体験あり」と答えていることから、項目得点と自我体験の間に一定の関連があるということはいえるであろう。

## 研究 2

### 目 的

人生の意味への問いとの関連が示唆された自我体験について、補足的にインタビュー調査を行い、より具体的な体験内容と人生の意味への問いとの関連を検討する<sup>2)</sup>。

### 方 法

**調査対象者** 関西の大学の大学生・大学院生5名（男性3名、女性2名）である。

**調査時期** 2004年10月から11月である。

**インタビュー内容** インタビューは、自由度の高い半構造化インタビューによる。まず、研究1で使用した、人生の意味への問いと自我体験についての質問紙に回答を求め、その回答結果をもとに質問を行った。天谷（2001）での自我体験についてのインタビュー調査の際に使用された質問紙の15の質問項目に回答してもらい、その中で「体験した」と回答している項目について、さらに詳しい内容を質問した。

### 結 果

**自我体験者** 今回のインタビューで、渡辺・小松（1999）や渡辺（2002）を参考にして、狭義の自我体験と「独我論的懷疑」とを合わせて自我体験者であるとみなされたのは、AさんとEさんの二人であった。この2人の語りの内容を分類した結果、「自己の根拠への問い」「自己の唯一性の自覚」「独我論的懷疑」の3つの領域での語りが見られた。他の対象者（Cさん、Dさん）に

も、自我体験に関連すると思われる語りもいくつかあったものの、今回は明確に表現されているものについてだけ取り上げることにした。具体的にはTable 8に示すような語りが見られた。

Table 8 自我体験の具体例

自己の根拠への問い
・たとえば、その自分と全く同じ分子構造をもった有機化合物がここにあったら、それは何なのか、とか…。(Eさん)
自己の独一性の自覚
・それはなんというか、性格の暗い人が、明るい人になれない、とか、そういうのではなくて、何になってもそれは自分である、と。そういう感じです。だから、たとえば僕が、ものすごい科学技術を持ってたとして、浦田さんと全く同じ分子構造を持った、外見もまったく同じようなものになったとしても、それは僕である、と。そういう感じです。(Eさん)
独我論的懐疑
・たとえば、浦田さんがこうしてアンケートをとっていても、たとえば、浦田さんが生きていなくて、それそっくりのアンドロイドがまったく同じ動きをしていてもまったく関係ないじゃないですか。つまり、他の人が生きてるっていうのは、僕にとっては何にも関係のないことなんですよ。(Eさん)
・中学の頃よく考えてたのは、ほんとに世界が何かの舞台の上にある、と。で、自分が移動して自分が見える範囲では舞台があるんだけど、自分がその場から退場するとセットみたいにそれがなくなってて……っていうのは考えた。(Aさん)

**自我体験と人生の意味への問いとの関連** 今回の調査においては、自我体験が見出されたのは、5名中2名(Aさん、Eさん)であり、そのうち1名(Aさん)は、自我体験の中核である「自己の根拠への問い」には当てはまらず、独我論的体験が見られただけであった。また、インタビューで聴取できた範囲内では、独我論的体験が、今の人生観や人生の意味への問いに影響を与えていることはあまりないと思われる。

Eさんについては、自我体験者特有の表現が多く見られており、かなり典型的な自我体験者であるということがいえる。また、次の語りは自我体験的視点からの人生観についての示唆的な語りであるといえる。

僕は生きてる意味とか価値とかは、ないと思っているんですけど、だからできることは、生きてることを最大限味わうことで、やっぱりものを深く考えることだと思うんですけども、さっき言ったんですけども、他人って生きてても生きてなくても、全然自分にとっては何の関係もないじゃないですか。それと同様に、たとえば僕が生きてても、そっくりのアンドロイドでも、全然関係がないじゃないですか。てことは、やっぱり生きてるっていうことを味わえるのは、自分を通してでしかできないじゃないですか。だからその自分を基盤にして、ものを考えるっていうのがとても大切な、って思うんですよ。

この語りは、「生きてる意味とか価値とかは、ないと思っている」として全ての意味や価値を否定しながらも、「ものを考えるっていうのがとても大切」だという、生きる上での重要な「価



値」について語るという循環的な語りであり、結果的には「自分でものを考える」ということがEさんにとっての人生の「意味の源 (source of meaning)」であると読み取れる。この語りに見られる「他人って生きてても生きてなくても、全然自分にとっては何の関係もないじゃないですか」というのは、前述した自我体験の具体例でも挙げたように、「独我論的懷疑」であるといえる。また、「やっぱり生きてるっていうことを味わえるのは、自分を通してでしかできないじゃないですか」という表現の中の「自分」はまさに自我体験でいう「自我」であり、「自己の獨一性」を表現したものであると考えられる。Eさんは、自我体験的な視点に立って、「人生で価値あるもの」を捉えていると思われる。その点で、自我体験のおよびそれに類する視点が、その個人の人生観に影響を与えているということを示唆する語りであるといえるだろう。

### 考 察

本研究では、広義の自我体験者であると認められたのは、対象者5人中2人であった。そのうち、1名は狭義の自我体験には含まれない独我論的体験のみが見られたことから、典型的な自我体験者とみなされたのは、1名のみということになる。渡辺・小松(1999)や渡辺(2002)の研究における自我体験の発生率が20%前後であったという結果と照らし合わせても、やはり狭義の自我体験は、少なくとも大学生において、それほど普遍的な現象であるということとは言えないと思われる。

自我体験と人生の意味への問いについては、直接の関連を示す語りは見られなかったものの、自我体験と判定されたEさんの語りで、対自的自己意識が現在の人生観に影響を及ぼしていると思われる示唆的な語りが見られた。Eさんは、「人生の意味や価値は存在しない」としながらも、「やはり考えてしまう」と何度も語っていることから、Eさんにとって人生の意味への問いが、やはり非常に重要な問いであるといえる。

高井(2004)は、自我体験の発達心理学的な意味について考察し、自我体験は、「心の理論 (theory of mind)」の研究で検討されてきた反実仮想の理解や、言葉と指示対象との恣意的結合へのメタ認知的な気づきなどによる「相対的な世界観の獲得」の瞬間の体験ではないか、としている。このような気づきは、特に哲学的な人生の意味への問いの発生にかかわるものであると考えられる。なぜならば、このような相対的な世界観への気づきと、それにも関わらず「私が他の誰でもない私である」という自己の存在の孤立性・唯一性・例外性の感覚とのギャップにおいて「なぜ私が私なのか、その根拠、理由、意味は何だろうか」という問いが芽生えると考えられるからである。小松(2004)が指摘するように、そのギャップの解決方法の1つが「私だけが私である(私だけが存在している)」という独我論であるとするならば、Aさんの独我論的認識と、「その自分を基盤にして、ものを考えるってというのがとても大切」という語りは、人生の意味への問いと自我体験的認識の双方へのある種の解答であると考えられる。

このように、少なくともAさんにおいては、自我体験とそれに基づく世界認識が人生の意味への問いに密接に関わっているということが示唆された。今後この点をさらに検討することによって、個人がもつ暗黙の世界観や死生観などを浮き彫りにできると考えられるため、他の自我体験者および(体験を忘却した者も含む)非体験者の人生の意味への問いとの関わりを詳細に見ていくことが課題として挙げられる。

## 総合考察

本研究では、人生の意味への問いに関して、問いそのものの検討という観点から分析を試みた。Table 2に示した通り、問いの内容は、自己の存在価値や効力感から、人類全体の目的まで、様々な次元があることが明らかになった。これまでの研究における（すでに獲得・達成された）意味内容の分析においても、他者との関係性や、自己の成長や喜び、政治的・宗教的信条など、様々な次元の内容が見られており（e.g., Debats, 1999; DeVogler & Ebersole, 1980, 1981; Ebersole & DePaola, 1987; 浦田, 2007）、今回見出された問いの内容とも相対的に対応すると考えられる。意味内容については、その「幅（breadth）」や「深さ（depth）」という概念が提唱されているが（Reker & Wong, 1988）、問いに関しても、問いの幅や深さを問題にすることもできるであろう。

自我体験に関して、このテーマが抱えている困難の1つが、自我体験が、文字通り「体験」であるということである。当初、渡辺（1992）は、自我体験を、梶田（1980）にならって「対自的自己意識」と呼んでいた<sup>3)</sup>。しかし、渡辺（2004）は後に、自我体験は対象化されて経験的に認識された主我はすでに客我となってしまうことに生まれて初めて気づいて驚いたり、怪しんだり感動したりするといった経験なのであるから、まずは、自我体験を「体験」の研究として取り上げる必要性があるとして、「対自的自己意識」の体験を「自我体験」と呼び変えている。

たしかに、自我体験は、違和感や不思議な感じを伴った啓示的な体験として経験されるものであるから、その体験としての意味は非常に重要である。ただし本研究のように、その体験がその後の個人の現在の自己についてのある種の内容や、人生観などにどのような影響を及ぼすのか、ということを考える場合、その体験が実際にあったか否かとともに、その個人が自我体験に見られるような類の概念把握をしているかという「対自的自己意識傾向」とでも呼ぶべきものがあるかどうかを検討することも重要であると思われる。

以上、本研究では、人生の意味への問いそのものに焦点化し、その具体的な内容や背景についての検討を行った。今後は、問いの質的な差異やその変化プロセスなど検討によって、より詳細に人生の意味を問うことの心理学的な意味を明らかにすることが望まれる。

## 謝辞

本論文の作成にあたり適切なご指導をいただきました、京都大学大学院教育学研究科のやまだようこ教授に記してお礼申し上げます。また、質問紙やインタビューにご協力いただいた皆様にも心より感謝申し上げます。

## 注

- 1) 本来、このような2件法の尺度は順序尺度であり、間隔尺度以上の変数を必要とする因子分析を適用するのは厳密には適切ではないが、ここでは便宜的に因子分析により尺度を構成している。
- 2) このインタビュー調査は、浦田（2006）のインタビュー調査と同じ対象者に行われたものである。語りの分析はそちらを参照されたい。

- 3) 梶田 (1980) が「対自的自己意識」と呼んでいるのは、次の「三浦浩子の事例」である。

私が初めて自分で自分を意識したのは、私の記憶の中から探し出すとすれば、小学校五、六年の頃であったと思う。この場合の"自分で自分を意識する"というのは、どちらかといえば、自分で自分の中にいる自分という存在に気づいたと言った方がいいかもしれないそのような意識の仕方であった。……私は次のように考えたこともある。「私は本当に三浦浩子なのだろうか？たしかに人は私のことを"浩子ちゃん"とは呼ぶけれど、私は本当に三浦浩子なのだろうか？私のまわりの人は、私の中に三浦浩子という人間の存在を認めているかもしれないけど、私は自分の中に私という存在を感じることはできても、三浦浩子の存在を感じることはできない。私は私であり、その私はたしかに三浦浩子である。それは確かにそうなのだけれど、しかし、私が私であると感じる"私"の私と、三浦浩子であるということはどうしても結びつかない。なんだかへんだな」と。

### 引用文献

- 天谷祐子 (2001). 自我体験に関する縦断研究——小学校高学年・中学校1年生を対象として—— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 48, 97-106.
- Battista, J., & Almond, R. (1973). The development of meaning in life. *Psychiatry*, 36, 409-427.
- DeVogler, K. L., & Ebersole, P. (1980). Categorization of college student's meaning of life. *Psychological Reports*, 46, 387-390.
- DeVogler, K. L., & Ebersole, P. (1981). Adult's meaning in life. *Psychological Reports*, 49, 87-90.
- Debats, L. D. (1999). Sources of meaning: An investigation of significant commitments in life. *Journal of Humanistic Psychology*, 39, 30-57.
- Ebersole, P., & DePaola, S. (1987). Meaning in life categories of later life couples. *Journal of Psychology*, 121, 185-191.
- 梶田毅一 (1980). 自己意識の心理学 東京大学出版会.
- 亀田 研 (2003a). 青年期の生きる意味への問いに関する探索的検討 日本青年心理学会第11回大会発表論文集, 40-41.
- 亀田 研 (2003b). 青年期における生きる意味への問いに関する研究 (2) 日本教育心理学会第45回大会発表論文集, 234.
- 亀田 研 (2003c). 青年期における「生きる意味への問い」に関する研究 (1) 日本発達心理学会第14回大会発表論文集, 429.
- 亀田 研 (2004). 青年期における生きる意味への問いに関する探索的検討 (2) 日本発達心理学会第15回大会発表論文集, 414.
- 川喜田二郎 (1967). 発想法 中央公論社.
- 小松栄一 (2004). 自我体験——沈思のディスコース—— 渡辺恒夫・高石恭子 (編) 〈私〉という謎——自我体験の心理学—— 新曜社 pp. 165-184.
- 尾崎仁美 (1997a). 人生における意味・目的の「獲得」と「探求」から捉えた人生態度の研究 (1) 日本心理学会第61回大会発表論文集, 81.
- 尾崎仁美 (1997b). 人生における意味・目的の「獲得」と「探求」から捉えた人生態度の研究 (2) 日本教育心理学会第39回大会発表論文集, 200.
- 尾崎仁美 (1998). 人生の意味・目的の獲得と適応との関係——個性記述的観点の導入—— 日本教育心理学会第40回大会発表論文集, 199.
- Pöhlmann, K., Gruss, B., & Joraschky, P. (2006). Structural properties of personal meaning systems: A new approach to measuring meaning of life. *Journal of Positive Psychology*, 1, 109-117.
- Reker, G. T., & Wong, P. T. P. (1988). Aging as an individual process: Towards a theory of personal meaning. In J. E. Birren & V. L. Bengtson (Eds.), *Emergent theories of aging*

浦田：人生の意味への問いの諸相

- (pp. 214-246). New York: Springer.
- Reker, G. T., Peacock, E. J., & Wong, P. T. P. (1987). Meaning and purpose in life and well-being: A life-span perspective. *Journal of Gerontology*, **42**, 44-49.
- 高井弘弥 (2004). 発達心理学から見た自我体験 渡辺恒夫・高石恭子 (編) 〈私〉という謎——自我体験の心理学—— 新曜社 pp. 195-213.
- 浦田 悠 (2006). 人生の意味への問いについての語りの分析 京都大学大学院教育学研究科紀要, **52**, 294-306.
- 浦田 悠 (2007). 生きる意味の類型・深さと実存的空虚感との関連——看護学生と大学生の比較から—— 京都大学大学院教育学研究科紀要, **53**, 181-193.
- 渡辺恒夫 (1992). 自我の発見とは何か——自我体験の調査と考察—— 東邦大学教養紀要, **24**, 25-50.
- 渡辺恒夫 (2002). 自我体験の類型, 判定基準, およびアイデンティティとの関係 東邦大学教養紀要, **34**, 9-25.
- 渡辺恒夫 (2004). 〈自我の発見〉の再発見 渡辺恒夫・高石恭子 (編) 〈私〉という謎——自我体験の心理学—— 新曜社 pp. 131-152.
- 渡辺恒夫・高石恭子 (編著) (2004). 〈私〉という謎——自我体験の心理学—— 新曜社.
- 渡辺恒夫・小松栄一 (1999). 自我体験——自己意識発達研究の新たな地平—— 発達心理学研究, **10**, 11-22.

(教育方法学講座 博士後期課程3回生)

(受稿2007年9月7日、改稿2007年11月30日、受理2007年12月12日)

## The Questions about Meaning of Life: Trigger and Importance and Relationship between the Question and Ego-Experience

URATA Yu

The quest for the meaning of life is part of human experience. However past psychological researches on the meaning of life had not examined the question itself. The present study focused on questions about the meaning of life, and examined the trigger for quest, importance of the meaning and relationship between the question and ego-experience. In Study 1, a questionnaire survey was conducted on 164 college students. The results were as follows: (1) There were various questions which varied from the purpose of everyday life to the value of one's life to the basis of one's existence. (2) Male students quest for the meaning was more serious than the female students. (3) No relationship between the question types and the triggers for quest was found. (4) The correlation between the question and ego-experience was positive. Study 2 investigated the concrete narratives about the ego-experience through the semi-structured interview with five participants. Two participants were identified as the persons with experience, and one showed the suggestive narrative about the relationship between the question and ego-experience.